



川越唐人揃い

川越唐人揃い実行委員会代表 江藤 善章様

卓話者紹介 高山 肇会員

1949年福岡県北九州市生まれ。埼玉県で高校教師として社会科教育に携わる。退職後、韓国・木浦大学留学。2004年に川越市で、朝鮮通信使の仮装行列を復活させて、新たな国際友好・多文化共生パレードとして展開しています。

「川越唐人揃い多文化共生の国際友好パレード」を川越で15年間やっております。11月のパレードに約3万人の観客が集まりました。釜山からは芸術団を含め60名が参加し、パレードの参加者は総勢500名を超えました。たくさんの人たちが楽しくみんなが笑顔になるのが平和です。

「川越唐人揃い」とは、江戸時代の川越で、町人たちが川越氷川神社の例大祭で実際に行っていた朝鮮通信使の仮装行列のことです。

1592年、豊臣秀吉は領土拡張のために朝鮮を侵略し、大変な被害を与えました。しかし、徳川家康は朝鮮王国への秀吉の侵略に対して、最後まで否定的で一兵も朝鮮に行かせることはありませんでした。

その後、政権を握った徳川家康は、朝鮮王朝との友好平和こそが日本の平和に必要なだと考え、侵略によって多くの被害を受けた朝鮮王朝と交渉を重ねて国交回復を目指しましたが、何十万人の国民が殺され、3万人から4万人が拉致連行された朝鮮王国は、あまりの被害の大きさに怒り心頭で、簡単には国交回復は見込めませんでした。対馬藩から国交回復のための使者を送りましたが、使者が帰ってくることはありませんでした。

朝鮮側の国交回復の条件は3つ。謝罪、王陵を暴いた犯人の差し出し、そして、拉致した数万人の朝鮮人の帰国でした。家康は承諾しましたが、謝罪に関しては、家康自身が朝鮮侵略に関わっていなかったので拒否しました。そこで対馬藩は、徳川家康の国書の偽造で打開を図りました。その後、偽造が明るみに出ましたが、あくまでも国交回復と善隣友好を優先し、薩摩藩は処罰されることはありませんでした。

国交回復が実現し、朝鮮王朝と友好親善「善隣友好」の証として「朝鮮通信使」という名前で文化交流を行いました。「通信」とは「信（よしみ）を通わす」という意味です。通信使には各分野の優れた人が選抜されました。

江戸幕府の慶事や将軍の継承が行われる度に、必ず日本を訪問し、朝鮮国王の国書を伝達し、徳川将軍の国書を預かって帰る外交使節団でした。

その使節団は、8ヶ月から1年かけて、釜山から対馬・北九州・下関・大阪から淀川を上り、東海道を通り江戸に来る2,000kmを超える長旅でした。延べ30万人。当時の幕府1年分の予算に相当するほどの莫大な金額

を費やし、国をあげての歓迎でした。そして、長旅の間は各地で歓迎され交流が行われました。

朝鮮通信使は1607年から1811年までの約200年の間、12回に亘って日本を訪問し、その間は両国の間に戦争はありませんでした。このように長い間戦争がなかったのは、国境を接している国では前例がなく、世界的に稀な事例です。

1978年、対馬で祭りの一環として始まった朝鮮通信使の行列は、現在、日本のNPO法人 朝鮮通信使縁地連絡協議会と韓国の財団法人 釜山文化財団とが手を取り合い飛躍しています。

2017年、「朝鮮通信使に関する記録」がユネスコの「世界の記憶」（世界記憶遺産）に登録が決まりました。通常、申請する時には国が動きますが、この問題に関しては国が動かさず坪が明かないので、日本と韓国、双方の民間団体だけで申請しました。

朝鮮通信使の行列を真似た仮装行列は、日本の各地の祭りの中で再現されています。実は江戸でも行われていました。神田明神祭礼絵巻に朝鮮通信使の仮装行列が描かれています。日枝神社の山王祭の記録にもありました。

平和で友好関係が継続したので、江戸時代、日朝間で漂流民に対する丁寧な対応が続きました。日本の舟が季節風に煽られ朝鮮に漂流した日本人は、1618年から1872年まで1,235人でしたが、無事に帰国することができました。反対に朝鮮から日本に漂流した人数は9,778人。日本のどこに漂着しても、藩が保護し面倒を見て、藩のリレー方式で長崎の出島まで連れて行き、最終的に対馬藩が朝鮮に戻しました。

これが信（よしみ）を通わした友好の国の証です。こうした歴史から私たちが学ぶことは、「憎しみは悲しみを生み、交わりは豊かさを生む」という事実です。これこそが未来に生かさねばならないことだと思います。